

2024年 3月 3日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「死を見つめて」 関東学院教会牧師 高橋彰

聖書 マタイによる福音書27章55-61節

◆イエスの死

27⁵⁵ またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。⁵⁶ その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。

◆墓に葬られる

⁵⁷ 夕方になると、アリマタヤ出身の金持ちでヨセフという人が来た。この人もイエスの弟子であった。⁵⁸ この人がピラトのところに行って、イエスの遺体を渡してくれるようにお願いした。そこでピラトは、渡すように命じた。⁵⁹ ヨセフはイエスの遺体を受け取ると、きれいな亜麻布に包み、⁶⁰ 岩に掘った自分の新しい墓の中に納め、墓の入り口には大きな石を転がして置いて立ち去った。⁶¹ マグダラのマリアともう一人のマリアとはそこに残り、墓の方を向いて座っていた。

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

十字架上で死なれたイエスは、木から降ろされ、埋葬されました。今日の場面は「キリストの葬り」について記された箇所です。短い記述で、今までイエスと共にいた者達は皆逃げ去り「遠くから」(27:55,26:58) 見ているしかできなかった中で、ヨセフという弟子が初めて登場し、埋葬に携わります。

「キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと・・・」(Iコリント15:3-4)

使徒パウロが、弟子たちが伝えた初期のキリスト伝承では「葬られたこと」という語も含んでいます。埋葬はイエスの死の事実を証言する出来事でした。復活顕現は、死なずに回復したのではないことを伝えます。

マタイ福音書ではヨセフは「金持ち」で「弟子」と記されます。別の福音書では議員だとも記されます。ヨセフは勇気を出してイエスの遺体の引き取りをローマ当局に願います。それができる立場であるが、同時にイエスの仲間であることを表明することはリスクもあったかもしれません。しかし彼は自分のなしうる役目を担い、一場面で消えて行きます。信仰は今の自分だからなしうる「この一つの出来事」を引き受けて担うことから意思を与えました。ヨセフの名は十字架を担いだシモンと同じく、イエスの十字架の受難に伴って語り継がれます。彼らのひと時のイエスへの協力に対し、主イエスは彼らの命、生涯に同伴されています。

しかし彼らも含め、イエスの死に際して、人は誰も同伴することはできませんでした。イエスが受けた苦しみ、痛み、感じられた孤独、絶望に寄り添うことはできなかったのです。受難節にわたしたちはこのように死に向かって歩まれたイエスの跡をたどるように受難物語を読み返し、祈りの時期を過ごします。そしてわたしたちが死に瀕する時、苦しみや孤独に置かれたと感じる時に、わたしたちはイエスの苦しみや痛み、孤独に最も近づくのではないのでしょうか。人として生きられた神の子は、人の無力さ、弱さにおいてその力(権能)を最も現わにされたのでした。

「ピエタ」とはイタリア語で「哀悼・敬虔・慈悲」を意味する言葉で、十字架から降ろされたイエスの遺体を抱き嘆くマリアを描いた作品の題につけられています。聖書テキストはイエスの死と葬りを簡素に記しますが、信仰の伝統では救い主キリストの死を嘆き悲しむ悲哀を思い共感的に伝えられてきました。特に14世紀末以降のヨーロッパでの疫病ペストの大流行や長期の激しい戦争により失われたいのちを覚え、共感が広がったと言われます。同時期に「メント・モリ」(死をおぼえよ)という警句も広まりました。疫病や戦争で死が身近にある人びとは、生きながら魂は死の中に置かれたかのように感じられていたとも言えます。しかし、福音書は死を深く見つめるようにと導くような記述ではありません。むしろ簡素に描かれます。そして、マタイは死の直後から、そこには復活の兆し、いのちにたいする神のちからが死の瞬間にまで入り込むように記します。「死を見つめる」ことではなく、その先へ、「死の向こうを見つめる」ことへと促しているようです。

イエスの死と埋葬を遠くから見つめていたのは、イエスが宣教を始められたガリラヤの地で最初期からイエスに従い仕えてきた(ディアコネオー)女性たちでした。「ゼベダイの子らの母」はかつてイエスに、王座に就かれる時には弟子である自分の息子二人を左右に座らせてほしいと懇願しました(20:21)。十字架で死なれたイエスをどのような思いで見つめていたのでしょうか。息子たちは逃げ去りました。ローマ帝国に支配されたユダヤ社会の中で、男性たちは自分たちの社会的な生、立場や面子が失われてさらされることを恐れてイエスから去りました。立場や権利も与えられていなかった女性たちは近づくことはできませんでしたが、遠くからじっとイエスを見つめていました。イエスの死と、埋葬を目撃していた女性たちだったから、三日目に墓で起きた出来事に最も衝撃を受け、「復活」の最初の証人となったのでした。



ミケランジェロ作「ピエタ」

教会の約束

わたしたちは、神の恵みによってイエス・キリストは主であると信じ、告白してバプテスマを受け、この教会の一員に加えられましたので、聖霊の助けによってこの約束をいたします。

わたしたちは、この教会が人によってではなく神によってできたものと信じ、主の日の礼拝、教会の定めた集会に参加し、教会がきよくなるよう、一致するよう、栄えるように祈ります。またバプテスマと聖餐の二つの礼典、そして聖書の教えと教会の定めた秩序とを守ります。

わたしたちは、この教会を支え、また世界に福音を伝え、神のみ心が広く行われるために進んで必要なものをささげます。

わたしたちは、主にある兄弟姉妹として愛しあい、互いの喜びと悲しみを共にいたします。

わたしたちは、ひとりで祈ることや家族と共に祈る生活を大切にし、わたしたちが預かった子どもたちを神に喜ばれるものになるように教え育て、またまことの心と正しい行いとすべての人を愛することによって、人びとを救い主に導くよう心掛け、主と再び会う時まで、この約束を固く守ります。

わたしたちは、どこにあってもこの約束の精神と神の言葉の真理が実行される教会に加わることを約束いたします。

日本バプテスト同盟 関東学院教会

「教会の約束」について

「教会の約束」と言われるこの言葉は、Church Covenant と言い、本来は教会契約と訳されるべきものです。

バプテスト教会の一番の特徴はこの「契約」を結ぶということにあると言われます。17世紀にイギリスに発足した初期のバプテスト教会は、ただ信仰を告白しバプテスマを受けた信仰者の集まりとしてではなく、「契約共同体」として教会形成がなされました。

契約とは、第一に神と教会員の、第二に教会員相互に交わされる二重の構造を持ちます。教会の一員になるとは、神との、そして信徒相互の契約のパートナーになるのだという自覚と責任をもって集まっていたのでした。

一つの教会が各自で教会の契約を結ぶゆえに、各個教会が尊重されるのです。そういう意味で「教会の約束」はバプテスト教会の本質的で重要な意味を持っています。

本来ならば関東学院教会固有の「教会契約」があるのが望ましいですが、教会では、日本バプテスト同盟に連なる教会が多く採用してきた約束の言葉を採用してきていました。この「教会の約束」の本文は2009年改訂新版の日本バプテスト同盟「信徒の手引き」にある口語文の言葉です。かつて関東学院教会で唱えられていた文章は文語体でしたが、このたび聖餐式の中で唱和することを再開するにあたり、同内容の口語文を採用いたします。

聖書では、神はイスラエルと契約を結ばれた方であると証言しています。そしてイエスの十字架と復活は、神とわたしたちの新しい契約です。神は罪ある人を愛し、赦し、救い出して新たに生かしてくださいます。

約束してくださる神に支えられ促されて、わたしたちも神と、そして人々と、愛と赦しの関係に生きるというこの教会の約束を心から唱和し、その道に歩みたいと心から願います。